

七浦の祭りと宮司の役割

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050438

8. 七浦の祭りと宮司の役割

小菱 愛未

1. はじめに
2. 七浦地区の祭り
3. 番場氏と七浦地区の関わり
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

今回調査を行った七浦地区は現在 13 の集落に分かれており、七浦全体で年間 40 以上もの神社祭礼が行われている。その全ての神社祭礼を執りまとめているのは七浦で代々宮司を務める番場氏である。本章では、七浦地区の各集落の年間祭礼、宮司である番場氏と七浦地区の関わりについてまとめたい。

2. 七浦地区の祭り

七浦地区の 13 の各集落には集落の神社が各集落に 1 社ずつあり、七浦全体の神社として皆月に皆月日吉神社がおかれている。各集落では火祭り、春祭り、夏祭り、秋祭りが行われる日程が決まっており（表 1）、集落によって、元々火祭りを行っていない集落（皆月、樽見）、春祭りと火祭りを兼ねて行う集落（吉浦、餅田、薄野）、祭りをを行う時期による名称の違い（夏祭りと秋祭り）など、集落ごとに祭りの実施形態は異なる。

また、七浦地区の宮司は番場氏の初代が七浦の宮司として任ぜられた 1561 年から（樽見は戦後から）番場氏 1 人（現在は 2 人）が務めるため、七浦の神社祭礼は同日に祭りが重ならない様に日程が調整されている。

本章では、七浦の各集落の方々への聞きとりと文献をもとに、現在行われている神社祭礼の形態、変容、そして宮司である番場氏と七浦の関わりについて述べていく。なお、大滝、鶴山、餅田、百成大角間、暮坂、樽見については聞きとりが出来なかったため、祭りの内容については『門前町の祭り』（2004: 68-70）に依拠し、本報告書では割愛させて頂く。

2.1 皆月¹

皆月日吉神社は、七浦のほとんどの方が皆月の神社であると考えているそうだが、本来は七浦全体の神社である。皆月日吉神社は 6 千万円ほどかけて K さん（五十洲、男

¹ 本項の記述は、M さん（皆月、男性、30 歳代）、I さん（皆月、男性、60 歳代）、N さん（皆月、女性、80 歳代）、A さん（皆月、男性、80 歳代）、M さん（皆月、男性、70 歳代）、B さん（皆月、男性、80 歳代）、H さん（皆月、男性、60 歳代）、K さん（皆月、男性、30 歳代）、O さん（鶴山、男性、50 歳代）、N さん（吉浦、男性、60 歳代）、S さん（皆月、男性、60 歳代）、K さん（五十洲、男性、70 歳代）への聞きとりにもとづく。

性、70歳代)ら4人で建てたものである。皆月にあるもう一つの神社、豊受神社が皆月の神社である。

表1: 七浦地区の年間祭礼

地区名	神社名	祭神	火祭り	春祭り	夏祭り	秋祭り
皆月	皆月日吉	大己貴命・大山咋神		4月3日	8月10,11日	
	豊受	豊受大神・大物主命		5月16日		9月16日
五十洲	五十洲	天照大神	2月21日	3月2日	8月1,2日	12月2日
吉浦	白山	伊邪那岐命・伊邪那美命	春祭りに	3月17,18日	8月18日	
矢徳	八王子	国狭槌尊	2月13日	3月22,23日	8月22,23日	
中谷内	日吉	大山咋命・大物主命	2月4日	3月21日		9月21日
大滝	大滝	速秋津姫命	2月11日	3月8日		9月10日
鶴山	春日	経津主命・武甕槌命 天児屋根命・比売大神	2月8日	3月6,7日		9月6,7日
餅田	餅田	天照大神	春祭りに	3月14日		9月14日
百成 大角間	百成	応神天皇・神功皇后 比売大神	1月10日	3月9,10日		9月14,15日
井守上坂	井守	少彦名命	1月8日	3月11,12日		9月11,12日
薄野	八幡	応神天皇	春祭りに	3月15日		10月15日
暮坂	住吉	底筒之男神・中筒之男神 表筒之男神	春祭りに	3月5日		9月18日
樽見	日吉	大己貴命・大山咋命		3月5,6日		10月20日

出所: 『七浦民俗誌』1996: 212、『新修門前町史 資料編6 民俗』2005: 158、聞きとりをもとに筆者作成

皆月上記の他に行われる祭りとしては、1月1日の元旦祭り、1月16日の豊受社神明祭、3月8日と9月8日の恵比寿祭り(漁師祭り)、12月8日の五穀豊穰感謝祭がある。

元旦祭りは午前0時に皆月日吉神社で、午前8時に豊受神社で行われる。その様子については『七浦民俗誌』(1996: 214)に「日吉神社の境内に篝火が焚かれ、宮司とその跡継ぎは日吉神社、豊受社で神事を行う」との記述がある。

豊受社神明祭は『七浦民俗誌』(1996: 214)によると「豊受社に供物を供える行事であり、15~6軒くらいの豊受社の氏子が参列する」とある。神明祭は5月16日、9月16日にも行われる。

恵比寿祭りは皆月の漁師の祭りで、『門前町の祭り』(2004: 65)によると「豊漁と海上安全の祈願とお祓い神事。境内に幟旗を立てて午前11時から祭礼開始」とある。

皆月日吉神社の春祭りである皆月日吉神社春季定例祭は『門前町の祭り』(2004: 65)によると「境内に幟旗を立て、午前10時より神事が始まる。その後、御幣、榊を持った総代を先頭に、伴旗持ち猿田彦の天狗・神馬・大太鼓・子供三人の小太鼓打ち・神輿と順々に神社を出発してお仮屋(宮司社務所)着。そこで昼休み。午後1時からお仮屋参りが始まり、午後3時に神社に向かって出発(お発ち)神社境内での馬駆け、玉砂利参道での神輿かけが行われてから、神様の本殿遷座が行われて祭礼は終わる」との記述があるが、現在では神輿はでていないようだ。

豊受神社での春祭りは『門前町の祭り』(2004: 65)によると「午前11時から神事が始まり、終わりにお供えのお神酒と餅をいただく。幟旗が立つ」とある。

皆月日吉神社の夏祭りは山王祭と呼ばれ、正式名称は皆月山王祭りである。昔の山王祭りは8月5～6日に行われていたが、若者の仕事の都合に合わせて(『新修門前町史』2005: 169によると1960年から)8月10～11日に行われるようになった。

皆月区に山王祭の運営委員会がある。運営委員会は会長1人、副会長数名、幹事数名から成っており、会計は全員が兼務する。

以前は年間祭礼については河南町、本町、西町の3つの町で順番に一年ごとに世話役(「人足」と呼ばれる)を用意してきたが、平成20(2008)年ごろからは各組から3人ずつ世話役がでるようになった。その中には組親が含まれている事が必須である。世話役の日当は2千円である。

当時は出店が多く並んでいた。祭りの一週間前から小学生たちが地区の道を太鼓などを鳴らして歩く「場ならし」が行われる。当日の朝は、現在は神輿が通る家の人が道に塩をまいて清めるが、昔は浜の砂を各家が家の前に撒いていた。「ウマカケ神事」で使用する馬は、以前は皆月の住民の馬を借りて用いていた。しかし皆月に馬がいなくなると、金沢から馬を借りていた時期もあったが、馬を借りるには大きな費用かかる上に、借りた馬は叩くことも出来ないため現在はウマカケ神事はやっていない。また、曳山用の竹は薄野の人に金を払い、切ってもらった竹を使っている。山王祭はアマメハギ同様、女人禁制であるが、最近では太鼓叩きに女性が参加して活躍している。

皆月青年会では7月最終日曜日に総会を開き、準備の段取りについて話し合う。神輿は区が、曳山は青年会が担当する。準備の段取りとしては、総会時に幕を吊るしたり、竹を切ったり、提灯を吊るす縄(風貌から納豆と呼ばれる)をつくる。8月4日からはお仮屋作り、鳥居作り(和紙貼り)、キリコ作りを開始する。曳山は祭りの2～3日前に組み立てられる。

10日の宵祭りでは午前5時から山飾り、午前9時半から山車の竹を切って曳き下ろす。11時30分からは休憩。午後5時から曳き始める。塩で清められた道を山車、天狗、神輿の順にとおっていく。山車には1体の人形と7尺の布を付けた竹篋が立っているが、この7尺の布は七夕に関連しており、布に願いを込める習慣がある。皆月で子が生まれるか、結婚した者が出た場合はその名前を布に書くのである。午後8時ごろ神様の

図1 皆月日吉神社年間祭礼日程表（宮司さん提供）

平成二十二年度 皆月日吉神社年間祭礼日程表	
一月一日	元旦祭 午前0時 皆月日吉神社 午前八時 豊受神社
一月二日	家庭祈願・被い
一月六日	アマメハギ行事（午後五時三十分頃より）
一月十六日	神明祭（豊受神社）午前十一時
三月八日	恵比須祭（事代主神社）午前十一時
三月二十八日	総代会（役員会）
四月三日	春季定例祭 皆月日吉神社（午前十時）
五月十六日	神明祭、（豊受神社）春祭 午前十一時
六月二、四日	石川県神社総代会研修旅行
八月 日	総代会（役員会）
八月十日、	山王祭、皆月日吉神社夏季大祭
八月十一日	御旅所祭、本社遷座
八月十五日	戦没者慰霊祭（慰霊碑前）午前八時
九月 八日	恵比須祭（事代主神社）午前十一時
九月十六日	神明祭（豊受神社）午前十一時
十一月 日	五穀成就感謝祭 皆月日吉神社
十二月 日	伊勢参宮旅行二泊三日 神宮大麻頒布

休憩所である御旅所に着く。御旅所にはお飯屋、紙灯笼つくられた宝燈、旗、鳥居、榊と御幣などが用意されている。御旅所での流れとしては、まずお飯屋と鳥居の間を馬が三往復し、神様の魂を御幣に移し、榊と共に鳥居から仮小屋に進み、魂をお飯屋に移す。最後に神輿に鳥居をくぐらせてお飯屋にとめ、神様のお飯屋入りが完了する。宵祭りの日は山車の上で暴れる地点が一カ所ある。

11日の本祭りはまず午前6時に宵祭りで暴れた山車を整えるための山飾りを行った後、午後2時から再び曳山が始まる。山車や神輿が通る家はお金やお神酒をふるまう事が多く、山車を停める家の前などで飲むそうだ。神輿は以前、20人ほどで担ぎ、百成大角間の人も運んでいたという。『七浦民俗誌』（1996: 234）には「昭和63（1988）年以降は百成が人手不足を理由に神輿の人足を断ってきたため、矢徳にある池端林業という会社に頼んで、人を賄っている」との記述があることから、百成大角間の人が山王祭の神輿を運んでいたのは昭和63（1988）年までであると分かる。現在神輿は台車に乗せ、Mさん（五十洲、男性、70歳代）が毎年手配する皆月の外の人6人ほどに金を払い、担いでもらっている。以前、神輿を皆月の人が担いだところ酔っぱらった人が海に投げてしまい修理に金がかかったため、それ以来皆月以外の人に金を払って担いでもらっているそうである。また、曳山は昔、皆月の青年会百人近くで引いていたが現在は50～60人程度で、午後6時に宮入りをする。本祭りでは山車の上で暴れる地点が二カ所ある。

12日は山車や御旅所の解体作業を行う。解体されたものは日吉神社で保管する。そ

の後青年会の役員が午後 6 時ごろから打ち上げを行う。これを裏祭りと呼び、集会場であんで場が盛り上がってきた頃、太鼓を叩いて宵祭り、本祭りで通った神輿のルートと同じルートを練り歩き、午後 9 時ごろには解散する。

秋祭り（秋の神明様祭り）は『門前町の祭り』（2004: 66）によると「神明様とは元皆月の本社であった神明宮のことである。幟旗を立てて、午前 9 時より神事が始まる。終わりに直会が開かれる」との記述がある。

五穀豊穰感謝祭は、番場家が七浦内の氏子総代に感謝する祭りで、日吉神社に各地区の氏子総代が集まって神事が行われる。その後番場家が用意した地元でとれた蕎麦を食し、各地区の氏子総代をもてなす。『門前町の祭り』（2004: 66）によると「この祭礼は昔は 11 月中旬頃の申の日に実施されていた」そうである。

2.2 五十洲²

五十洲で行われる神社祭礼としては、表 1 で記した年間祭礼の他に 1 月 1 日の元旦祭りがある。春祭りの日は漁師祭りも兼ねて行われる。

元旦祭りでは宮司の番場さんが七浦地区の各集落をまわるのだが、五十洲は七浦の集落の中で一番目に番場さんがいらっしゃるため、午前 9 時に五十洲の住民全員が五十洲神社に集まり、番場さんと共に参拝する。厄払いを希望する者はこの時に番場さんに厄払いを行ってもらえるという。元旦祭りの供え物は米と塩くらいで、春祭りや夏祭りの様な多種類の食べ物は供えないそうだ。午前 11 時から七浦公民館で新年御礼会があるため、番場さんは 11 時まで七浦地区の他の集落の元旦祭も終わらせるようにしているそうである。

鎮火祭は五十洲で参加できる人全員が五十洲神社に集まり、午前 11 時から始まる。お参りをして供え物のおさがりを頂く。その後湯を沸かし、酒、笹で湯をかき混ぜ、その笹を目に付けて社に投げる湯立神事も行う。

春祭りは先述したように漁師祭りも兼ねて行うため、祭り二回分の玉串料を番場さんに支払う。以前は漁師祭りを春祭りと別に行っていたが現在は同日に行っている。供え物については春祭り用に米、酒、塩、水、お当（当番）が購入したり栽培したりした野菜、果物、などを供える。春祭りの儀式が終わると、供え物は漁師祭り用のものに変更する。漁師祭り用の供え物としては鯛のお頭や昆布などの乾物などがある。以前は漁師祭りの供え物のお下がりには漁師だけで食べていたそうだが、現在は漁師も漁師以外も関係なくお下がりを皆で食べるという。

夏祭りは 8 月 1 日が宵祭り、2 日が本祭りであり、五十洲で一番大きな祭りである。『七浦民俗誌』（1996: 129）にも「七浦地区の各村落単位で行われる祭りでは、皆月の山王祭に次いで大きい規模の祭りで、五十洲の村落全体が参加する」との記述がある。

² 本項の記述は、K さん（五十洲、男性、70 歳代）、N さん（五十洲、男性、70 歳代）への聞きとりによる。

夏祭りの内容は、五十洲神社の神を神輿に乗り移らせ、宵祭りと本祭りの二日をかけて五十洲の端から端までを神輿をひいて練り歩くというものだ。以前は神輿と共に曳山も出ていたが、曳山に据える何体もの人形を作る人が減少した事、曳山を引く青年がいなくなった事などから、現在では祭りを出すのは区とお当が用意する神輿とのぼり旗のみとなっている。祭りには必ず若者が帰ってきた昔と違い、現在の若者は祭りに参加出来るのは土日に限られるため、年配の方からは「祭りもできんのか」といった声もあるという。

五十洲神社を夕方に出発し、五十洲神社の周りを一周した後は浜へ向かう。区がお仮屋をつくり、そこで一泊する。

秋祭りは春祭りと同様に区の住民でのぼり旗を揚げ、宮の飾りつけをし、草刈りなどをし、番場さんにお祓いをしてもらう。

2.3 吉浦³

吉浦では2～3年前に火祭りが春祭りの日に組み合わされ、春祭りと共に行われるようになった。集落人口が明らかに減少したために2つの祭りを一元化したのである。

吉浦の火祭りの起源は昭和19(1944)年に起こった、13人の犠牲者を出した機雷の爆発事故である。事故の概要としては、昭和19(1944)年12月13日、吉浦に機雷が漂着した。七浦にやってきた海上保安部が「これは機雷ではない」と断言したため、吉浦の人が運んでいたが、運んでいた1人が転倒した事で、機雷が爆発してしまった。爆発時、着替えや子供への授乳のために帰宅した人を除いた13名が亡くなった。助かった人は5～6年嫌味を言われたという。火祭りが春祭りとは別日に行われていた頃は、神主と区長がお宮に上がるだけで、供え物もない簡素なものだったそうだ。春祭りと同日に行われる現在の火祭りはさらに簡素化し、「火を大事にしてくれ」と住民に呼びかけるだけだという。

春祭りは1日目が宵祭り、2日目が本祭りと呼ばれる。宵祭りとはいっても現在ではその日は何も行わないそうだが、以前は宵祭りの日にはその年の当番がちょうちんや白山神社と書かれた紅白ののぼりなどを準備していたそうだ。のぼりは個人が購入したものもあった。しかし、吉浦の高齢者の割合が徐々に高まってきたことで、準備と片付けの大変さなどからのぼりを立てることはしなくなったという。本祭りは集落住民の歩ける人皆が参加し、午前11時にお宮で祝詞があげられる。当番の役割は祭りの際のお宮の飾りと昼の食事を用意することである。供え物の飾りは、カボチャ等7種の山の幸、サザエ等の海の幸、米などである。10年以上前は海の幸として30センチほどの生のタイなどが供えられたが、現在はスーパーで購入した2切れで4千円ほどの塩マスに変わるなど、供え物の簡素化が見受けられる。当番はこれらの用意にかかった費用を当番の人数で割り、負担する。供え物には、当番以外の住民が家にある野菜などを持ち寄っ

³ 本項の記述は、Aさん（吉浦、男性、70歳代）への聞きとりによる。

たものもあるそうだ。玉串料は吉浦の区費から出すのではなく、祭りの際に住民が個々に持っていき、まとめて神主に渡す。

お宮での神事が終わると皆で昼食を食べる。昼食は当番がJAから注文する弁当である。JAから注文するようになる前は、現在は廃業してしまった川島旅館や猿山民宿などから注文して取り寄せていたという。

当番は現在2班で回しているが、(Aさんが区長になる前)は3班で回していた。さらに、2017年末にある終い寄り合いでは当番を1班のみにし、実質的に当番制をなくし、全員で準備をすることを提案する予定であるという。

夏祭りは『門前町の祭り』(2004: 67)によると「幟旗を立てて祭礼を行い、はじめに神社内での神事のあと、境内に出て湯立ての神事を行う。終えてから直会がある」とある。

春祭り、夏祭りはザイショの安全祈願、漁師祭り、海と山への感謝の意味を込めた祭りである。獅子舞や神輿は昔から出ていないそうである。

2.4 矢徳⁴

矢徳の火祭りについては、『門前町の祭り』(2004: 67)に「午前11時より、集落内に火の災厄がおきないよう祈願とお祓いの神事を午前11時より始める。その後、直会が開かれる」との記述がある。

春祭りについては『門前町の祭り』(2004: 67)によると、「お宮に幟旗を立て、祭礼をお祝いする。1日目は各家々で神棚にお供え物をして、お参りをする。2日目は午前11時より、神社内での神事が始まる。その後、直会を開く」との記述がある。

矢徳の祭りは昭和27(1952)年ごろまでは獅子舞や太鼓も出ていたそうだ。

2017年8月23日、私は夏祭りを見学させて頂いた。午前10時40分頃に矢徳集会場を訪れると既にエプロンを付けた女性5~6人ほどが集まり昼食の支度を行っていた。お当と呼ばれる神社の祭祀などで神事の世話をする家は現在4~5軒ずつ3班の持ち回りで行っている。集会場の裏の山の上に矢徳の八王子神社はある。八王子神社に到着すると、社の前には湯立神事の準備がされており、交差した二枚の日の丸国旗が社の正面の入り口上に注連縄と共に設置されていた(写真1)。拝殿の中に入ると、拝殿奥の祭壇の両脇には御神燈と書かれて吊り下げられた提灯とぼんぼりがあり、電気が点けられて淡い橙色の光を放っていた。供え物は拝殿の奥の赤色の神前飾の手前に二段になって祀られており、上の段には左から、魚、鏡餅、塩、酒の順に、下の段には左からスイカ、ダイコン、ニンジン、ネギ、カボチャ、白飯、キャベツの順に並んでいた。農家の家で作った野菜もあるそうだ(写真2)。私が八王子神社に到着した時には12~13人ほどの人が拝殿の正面向かって左側に、区長さんと宮司である番場氏がピンク色の袴を身にま

⁴ 本項の記述はTさん(矢徳、男性、70歳代)、Tさん(矢徳、女性、60歳代)Oさん(矢徳、女性、80歳代)への聞きとりによる。



写真 1: 八王子神社の様子



写真 2: 八王子神社拝殿内の様子



写真 3: 湯立神事の様子

2017年8月23日筆者撮影（写真1～3）

とい、拝殿正面向かって右側に座っており、祭りが始まる場所であった。

午前11時ちょうどになると、番場氏の「ほんならはじめっか」の一声で皆が姿勢を正し、祭りが始まった。小太鼓や榊、御幣などを用いて番場氏が二度祝詞を奏上した後、区長、お当のNさんが神前で二礼二拍手一礼するなどし、祭りは15分ほどで終了した。番場氏によると、1つめの祝詞は地域のお祓い、厄払い、お清めの意味を、二度目の祝詞は地域繁栄、農業に関する事、世の中の悪いことが起きないように見守ってください、といった意味があるそうだ。祭殿での儀式が終了した後は番場氏とお当のNさんが社の外に出ていき、すぐに湯立神事に入る（写真3）。八王子神社の正面に白色で花柄の家庭の調理で用いられるような大きさの鍋と、湯を沸かすための七輪が置かれている。昔は祭りのために神社にかまどをこしらえ、鍋も専用の鉄鍋を使用していたそうだ。鍋を正方形の中心とすると、正方形の4つの頂点に当たる箇所地面に埋められた穴があり、その穴にそれぞれ2メートルほどの細い竹が1本ずつ刺さっている。そして注連縄が正方形の三辺を結び、湯を沸かす鍋を囲っていた。番場さんとお当のNさんが拝殿を前にするようにして鍋の前に立ち、七輪に火を付け、大祓いで清めた湯に1メートルほどの笹をいれてかき混ぜた。番場氏はその笹を拝殿で住民にふりかけ、湯立神事は終了した。湯立神事は眼病予防のため、中谷地などでは紙垂を目に着けて社に投げつけ

る、という儀式を行っているそうだが、矢徳では紙垂を用いた眼病予防の儀式を行われなかった。最後はお神酒と御石米を全員で頂き、拝殿での祭事が終了した。

供え物は全員で番場氏の車に運び、後片付けをする。片付けが終わり次第、矢徳集会場に集まり 12 時ごろから番場氏も含めて全員で昼食を食べる。この日は JA から取り寄せた折り詰め弁当の他に、矢徳の女性達で作ったキュウリとかにかまぼこの酢の物や豆腐、そら豆なども机に並んだ。この日の様に、民宿や JA などから弁当をとる年もあるれば、ぬか漬けやわらびの保存食、昆布巻きなど、自分たちで料理した昼食を食べる年もあるそうだ。

2.5 中谷内⁵

中谷内の祭りでは湯立神事が行われる。神社で湯を清めて沸かし、紙垂を入れ、その紙垂で目を拭き、紙垂を神社に向かって投げると神様が病を浄化し、目の病気が治るといふまじないである。眼病については『新修門前町史』(2005: 166)に「囲炉裏で火をくべていた時代、煤による眼病に苦しんできた時代を伝える」との記述がある。投げつけた紙垂ははがさずにそのままにしておくため、乾いて社の壁にくっついているものや、はがれて紙垂の痕が社に残っているものもあるそうだ。

春祭りや秋祭りの際は供え物をお当が準備をする。中谷内はオクボ（大久保）、クイシャ（串屋）、コタキ（小滝）の 3 つの小集落に分かれており、毎年一つの集落がお当となり、祭りで供える赤飯や白飯、酒などを準備する。現在はオクボ 3 世帯、クイシャ 5 世帯、コタキ 7 世帯が暮らしている。

2.6 井守上坂⁶

井守上坂では 1 月 8 日の祭りの日に初寄り合いも行われる。

祭りは、以前井守上坂で発生した火事をきっかけとして行われている祭りである。祭りの日は、宮司が井守上坂の家を一軒一軒訪ね、お祓いをする事から始まる。全世帯のお祓いが終了すると全員で井守神社へ行き、お参りをする。その後区長宅で番場氏も含めて直会を行う。3 年ほど前から区長が毎年お当として供え物や直会の折り詰めの準備などを行っているが、以前は「村の全戸が持ち回りで祭りの世話役であるトウヤ（頭屋）を勤めて」（『七浦民俗誌』1996: 28）いたという記述がある。以前は直会で輪島塗の器を使用して、お当である家で作った料理を食べていたそうだ。番場氏が帰った後はその日のうちに初寄り合いを行う。

春祭り、秋祭りの直会はお宮で済ます。午前 11 時頃に拝殿に集まりおつとめを行った後、12 時から 12 余りの机を拝殿に準備し酒と共に食事を行う。最近では飲酒運転にも

⁵ 本項の記述は T さん（中谷内、男性、40 歳代）、T さん（中谷内、女性、40 歳代）への聞きとりによる。

⁶ 本項の記述は O さん（井守上坂、男性、70 歳代）への聞きとりによる。

気を使い、ノンアルコールビールの準備もするという。午後 15 時には解散する。

祭りのお礼の玉串料、お供え料は区費に含まれている。以前は太鼓やのぼり旗があったが現在は用意しなくなったという。祭りで使用する注連縄は以前、お当が家で結って準備していたが現在は購入した注連縄を使用している。

2.8 薄野⁷

薄野では祭りが一日ずつ、年に二回行われる。祭りの日はお神酒のお下がりなどを昼から夜中まで飲む。薄野の外へ出ていった若者は祭りの日に必ず帰ってきた訳ではないため、昔から祭りに参加するのは年配の方々の割合が高かったそうだ。薄野の祭りの日は地区外から多くの親戚が集まり、薄野の各家は赤色の御膳にご飯、味噌汁、豆腐やゴボウ、じねんじょ、サトイモなどが入った煮しめなどを約 20 食分用意し、食事を各家で行っていた。現在は集会場集合し、食事をとるといふ。

3. 番場氏と七浦地区の関わり⁸

七浦全体の宮司を務め、七浦の各集落の祭りを執りまとめているのは番場氏である。番場氏は初代から現在宮司を務める 17 代目まで代々宮司の家系で、神社の管理や祭礼での神事を行ってきた。16 代目の番場政晴さんのお話によると、番場家 14 代目の時に番場家の相続者がいないという危機に直面するが、15 代目として新たに養子を迎えたことでその危機を乗り越え、番場氏を存続させてきたそうだ。

現在番場氏は七浦全ての神社と祭礼を管理しているが、番場家初代から七浦全ての宮司を務めていた訳ではない。樽見に関しては『七浦民俗誌』(1996: 31) に「戦前までは輪島市から神主を招いて祭りをとり行っていた」との記述がある様に、七浦の中で樽見のみ、番場氏とは別の宮司が 1940 年頃まで樽見の神社祭礼を執り行っていた。樽見で神事を行ってきた宮司が亡くなった 1940 年頃、番場家が樽見の宮司を引き継ぐことになったそうである。つまり、番場氏が七浦地区全ての集落の宮司を務めるようになったのは戦後以降だということになる。

現在宮司を務めるのは 16 代目の番場政晴さんと、その息子である 17 代目の番場誠さんであり、誠さんは 2017 年 3 月に市役所を早期退職し、8 月 1 日より七浦公民館の館長も務めている。現在皆月の祭礼は 16 代目の政晴さんが、七浦の皆月以外の地区の祭礼は誠さんが宮司として執りまとめている。

3.1 番場山

もともと番場山のあたりは大峰、中峰、小峰という名前がついていた。先代の番場氏はそのうち大峰を所有しており、牧場などを経営していた時もあったそうだ。その頃か

⁷ 本項の記述は K さん（薄野、男性、80 歳代）への聞きとりによる。

⁸ 本節の記述は B さん（皆月、男性、80 歳代）、M さん（皆月、男性、30 歳代）への聞きとりによる。

ら大峰、中峰、小峰合わせて番場山と呼ぶようになったのである。しかし先代の番場氏が大峰を村に売ることになり、番場山は一時期、皆月の共有財産となったが、現在は番場山を神社の持ち山として名義を宮司である番場氏に移し、番場山の管理を行っているそうである。

3.2 アマメハギの保存と番場氏

番場家は毎年1月2日に皆月と五十洲で行われるアマメハギに大きく関わっている。現在のアマメハギは皆月、五十洲どちらも神社で神事が行われるが、本来アマメハギは神社と関わりのない祭りであった。

・皆月

アマメハギと神社とが関わるきっかけとなったのは昭和40(1965)年ごろである。この頃、部落に若者がいない事などから皆月としてアマメハギを行っていくことが徐々に難しくなっていた。番場氏15代目である番場房常さんは、アマメハギはなくしてはならない行事だと考え、部落からアマメハギを引き受け、アマメハギ保存会を設立し、自らが保存会長に就任した(現在は政晴さんが保存会長を引き継いでいる)。この時からアマメハギを行う前には皆月では社務所でお祓いを受けてから各家々をまわることになったそうだ。アマメハギを部落から引き継いだ当初、番場氏の方で新たにアマメハギの道具を揃える必要があった。そのため、お宮にあったお面、神主が着ていた衣装、すりこぎなども番場氏が用意したそうである。また、番場氏は、アマメハギを行う人を確保するため、青年会に対して、青年会の出初式の後にお祓いを受けてアマメハギに参加してもらうように頼み、現在の様にアマメハギに青年会が積極的に関わるようになったそうである。Mさん(皆月、男性、30歳代)によると、最近ではアマメハギの日には10人ほどの青年会メンバーが七浦へ帰ってくるそうである。

皆月のアマメハギ当日は、午後5時ごろになると、青年会の役員が社務所に集まり、着替えは、青年会の役員が神主の指示のもとに役に決められたものの着替えを手伝う。その後、社務所の神棚で神主からお祓いを受け、神主が天狗役の者に天狗面と御幣を渡した後、お神酒を飲んで社務所を出てアマメハギに向かう、といった流れである。

・五十洲

五十洲のアマメハギも皆月と同様に元々は神社と関わりのない行事であった。番場氏が宮司として五十洲神社で神事を行うようになったのは30年以上前である。

当日の流れとしては、『門前町の祭り』(2004: 2)によると「午後3時ごろ、区の役員とアマメハギの役をする者が区の集会場に集まり…」との記述がある。五十洲でのアマメハギの神事は皆月のアマメハギの神事が行われる前に行われているそうである。また、五十洲では神社での神事が行われるようになる前は、中町にある「壮年会倶楽部」集会場に青年が集まって装束に着がえ、各世帯をまわったそうだ。以前は現在の皆月と同様に、アマメハギが子供がいる家へ入っていたが、集落に子供がいなくなったことから現在は装束を着て五十洲神社でお祓いを受けるだけだという。

4. 考察

各集落で神社祭礼について聞きとりを行う中で、私は七浦地区で神社祭礼が果たしている役割について考えた。

神社がなく、神社祭礼が行われない私の地域では、地域ぐるみで行う行事は年に2回の集会場の草むしり、親睦会を兼ねた食事会のみであるが、どちらも地域の半分程度の世帯しか参加せず、参加してない家に関して他の家の住民が触れる事はない。

七浦では集落の祭りの前日には集落の住人が集まって神社の掃除を行い、当日には喪中の家を除いたほぼ全世帯が祭りに参加する。実習中に見学させて頂いた矢徳の祭りでは祭りに参加していない住民がいると「〇〇さんはどうしたんけ」という声が自然とあがっていた。これらは七浦の方々にとって当然の事かもしれないが、神社祭礼に馴染みのない私にとって集落全体が一体となって祭りに関与する様子は非常に新鮮であり、集落の住民同士のあたたかな関係性に魅力を感じた。

七浦地区の各集落では集落全体の行事である神社祭礼が集落ごとに年に2~5回行われる。祭りの準備は決して住民の一部のみが行うわけではなく、住民同士で協力して供え物や直会の準備を行う。七浦地区の神社祭礼は、祭りの本来の意味である収穫への感謝などと共に、集落の住民同士の関係性を強める役割を担っているのではないかと考える。

住民一人一人は祭りの専門的な知識を持っているわけではない。七浦では宮司である番場氏や、集落の区長、氏子総代、お当の方々、青年会などが中心となり、時には住民同士で教え合いながら祭りを実施する。高齢化が進み、伝統的な祭りの在り方が以前と比べて少しずつ変化している中、高齢化と向き合いながら出来る範囲で各自が祭りに関わり、地域一体となって祭りを守っている。このようそれぞれの住民の取り組みの結果、七浦地区の祭りが独自の文化として各集落に残っているのだと考える。実習の中でその独自の文化の一片を目にする事が出来、大変貴重な経験をする事が出来たと感じた。

5. おわりに

今回の調査では今まで自分にあまり馴染みのなかった神社祭礼をテーマに選びました。多くの住人の方々から直接お話をうかがう中で、私の知らない七浦での暮らしぶりにたくさん出会う事が出来ました。実習中、七浦地区の多くの住民の皆様にご協力をいただいた事で、貴重なお話をうかがうことが出来ました。見ず知らずの学生の突然のお電話やお宅への訪問に快く応じて下さった七浦地区の皆様へ深く感謝申し上げます。